

29年11月研修会

「飛鳥」

(東漢氏の史跡を訪ねて飛鳥を歩く)

資 料

奈良・人と自然の会

歴史文化クラブ

(11月14日(火)・雨天中止)

行程表

9:40 近鉄・飛鳥駅前 集合

西大寺 8:38(急行) → 橿原神宮前 9:11 → 橿原神宮前 9:31 → 飛鳥 9:35

*コース (歩行距離: 約5km)

飛鳥駅 → 中尾山古墳 → 休憩所(講義) → 高松塚壁画館

→ 高松塚古墳 → 休憩所・昼食 → 於美阿志神社(檜隈寺跡)

→ 四神の館 → キトラ古墳 → 壺阪山駅

(15:45 発に乗車予定 16時頃橿原神宮前駅で解散)

飛鳥の遺跡について

By 坂東久平

^{やまとのあやうじ}東漢氏は応神朝に渡来し、飛鳥を拠点として活躍しました。^{おみあし}於美阿志神社（^{ひのくまでら}檜隈寺跡）は、^{あちのおみ}阿知使主を祀っている。

今回は、秋の飛鳥をユックリと歩き、野辺の草花などを鑑賞したいと思います。
中尾山古墳、古代寺院跡（^{ひのくまでら}檜隈寺跡）やキトラ古墳、高松塚古墳を巡ります。

1. 中尾山古墳（史跡）

7世紀末に築造された終末期の八角墳である。

本古墳の立地は、古代には檜隈と呼ばれたところで、尾根の最高所に位置する。北に天武・持統天皇陵があり、南に文武天皇陵や高松塚古墳が見えるところにある。

全面を葺き石で覆うと考えられる、上3段築成の八角墳で、外回りには2段の石敷きが廻る。つまり五重の段を持つ八角墳である。

対角長約**29.4m**、高さ4m程度である。底石1石、側壁2石、奥壁1石、隅石4石、扉石1石、天井石1石、の10個の石で構成された横口式石郭である。内部の大きさは約1m四方であり、底石の中央部分に方**60cm**、深さ**1cm**の彫り込みがある。ここに蔵骨器を安置した火葬墓だと推測され、かつて古宮土壇（豊浦寺北方）から出土と伝える金銅壺がここにあった可能性が考えられている。

近年、八角墳であること、火葬墓であることから、当古墳を^{ひのくまのあこのおかのえのみささぎ}檜隈安古岡上陵（文武天皇陵）とする説が強い。文武天皇の御陵ではないかとする考えが強い。

宮内庁治定の現文武天皇陵は飛鳥村栗原にあり、俗に塚穴と呼ばれ、またジョウセン塚ともいう。現陵が文武陵と認識されるのは安政年間からである。

2. 高松塚古墳（特別史跡）

7世紀末に築造された終末期古墳で、**直径23m**（下段）及び**18m**（上段）、高さ**5m**の二段式の円墳である。1972年に極彩色の壁画が発見されたことで一躍注目されるようになった。被葬者は特定されておらず、天武天皇の皇子説、臣下説、朝鮮半島系王族説の3つが主な説です。

丘陵の南斜面に築かれた直径**18m**の円墳。墳丘の高さは下方から約**5m**、墓室は凝灰岩の切石を組み合わせた横口式石槨である。石室は床石3石、奥壁1石、側壁各3石、扉石1石、天井石4石からなる。天井石は家形石棺のように上面を面取りしている。

石室の内法は長さ**265.5cm**、幅**103.5cm**、高さ**113.4cm**、内面には漆喰を**2~7mm**の厚さで塗り、剥落した南面を除く壁面に壁画が描いている。東壁は中央に青龍、その上に日像、南に男子4人の群像、北に女子4人の群像を描き、西壁は中央に白虎、その上に月像、南に男子4人の群像、北に女子4人の群像を描いている。北壁は、中央に玄武を描き、天井には金箔で星をあらわし、朱線で結び星座をあらわす。これは**28**宿を四方に描いている。石室内には、漆塗り木棺の残片があった。棺身の長さ**202cm**、幅**57cm**、木棺に附属する金具は、金銅透飾金具・金銅円形飾金具・金銅六花形座金具・銅製座金具・銅釘など、副葬品には海獣葡萄鏡・銀製大刀金具・ガラス小玉・琥珀丸玉・ガラス粟玉があった。

雨水の浸入やカビの発生などにより、壁画の退色・変色が顕著になっていることが問題となり、壁画の劣化防止策や保存方法について種々の検討が続けられた。特別史跡（古墳）と国宝（壁画）のいずれを守るのか、あらゆる可能性が追求されたが、最終的に、壁画の描かれている石室をいったん解体・移動して修復し、修復完了後に元に戻すという方式が採用された。

移動された壁画は、10年間かけて保存修理が行われ、修理完成後はもとの古墳へ戻される予定になっている。

3. 高松塚壁画館（250円）

館内には、壁画の検出当時の現状模写、一部復元模写、再現模造模写、墳丘の築造状態、棺を納めていた石槨の原寸模型、副葬されていた太刀飾金具、木棺金具、海獣葡萄鏡などのレプリカを展示し、高松塚古墳の全貌をわかりやすく再現している。

4. 於美阿志神社

桧前集落東南の丘陵上、小字「ヒガキ阪」にある。社域の鳥居右手に、「宣化天皇ひのくまのいおりののみや檜隈蘆入野宮跡」の石碑がある。

東漢氏の始祖阿智使主の居住地跡とされ、東漢氏が当地に檜隈寺を営み、当社はその鎮守の社であった。祭神は、阿智使主夫妻である。神社境内に、檜隈寺跡がある。

本殿は、もとは檜垣坂を隔てた西側にあったが、明治40年、檜隈寺金堂跡に遷座した。

5. 檜隈寺跡（史跡）

檜隈寺の建立は7世紀後半からと考えられる。近世、社地は宣化天皇檜隈蘆入野宮跡とされ、また神宮寺として檜隈寺の系統を引くという道興寺があった。

寺の伽藍配置は、中軸線が西方に振れ、塔を挟んで南に金堂、北に講堂が位置し、中門は西側に位置する特異なものであった。塔跡の南方に位置する土壇は、発掘調査前には中門跡と考えられていたが、実際には三間四面の仏堂の跡であり、塔の西側に位置する礎石建物が、その位置や規模からみて中門であるとみられる。伽藍主要部は回廊で囲まれ、回廊の西辺に中門、南辺に金堂、北辺に講堂が位置し、回廊内の東寄りに塔が位置していた。

塔跡には心礎と四天柱の礎石が4つとも残り、講堂跡には瓦積基壇が遺存するなど遺構の保存状況は良好である。

現存する平安時代の十三重石塔は、檜隈寺の廃絶後、塔心礎の上に建てられた。

6. キトラ古墳（亀虎古墳）

7世紀末に築造された終末期古墳である。明日香村の南西部、阿部山尾根の南斜面を削って作られた、直径約14m、高さ3.3mの円墳である。高松塚古墳と同様に極彩色の壁画で有名である。壁画は四神の他、子・丑・寅などの人身獣頭の十二支像。さらに天井には天文図があり、本格的な中国式星図としては、現存する世界最古のものとされている。

墓室は横口式石槨で二上山の凝灰岩を使っている。発掘調査の結果内部に漆塗木棺があったことがわかり、木棺には忍冬文の金銅製の飾り金具、金銅製六花形飾り金具がとりつけられていたことがわかる。副葬品には刀装具や琥珀丸玉などがあった。

7. キトラ古墳壁画体験館 四神の館 (無料)

昨年9月のオープンで、詳しい展示があります。

1階：キトラ古墳の壁画や出土品を保存管理・展示。

(壁画の公開は期間限定)

地階：キトラ古墳やキトラ古墳壁画について、体感型の展示。

8. キトラ古墳と高松塚古墳の比較

	キトラ古墳	高松塚古墳
四神像 (朱雀、青龍、玄武、白 虎)	白虎が北向き (珍しい)	白虎が南向き (一般的)
天井の絵	星空の様子を 精密に描いた 「天文図」	星空をデザインした 簡略化された 「星宿図」
四神像、日月像以外の 東西南北の絵	獣頭人身十二支像	男女群像
内部の天井の形	屋根形	平天井
石室の石材	凝灰岩 (二上山産)	凝灰岩 (二上山産)
石材の数	18	16

(引用文献)

1. ウィキペディア
2. 橿考研・友史会遺跡地図
3. 飛鳥周遊ウォーク (水野正好)
4. 河上邦彦 『大和の終末期古墳』 学生社
5. 明日香村教育委員会発行 「キトラ古墳」 1998年 10月
6. キトラ古墳 - 国営飛鳥歴史公園資料
7. 『日本歴史地名大系 奈良県の地名』 (「檜隈寺」の項)
8. 飛鳥の古社を歩く (和田萃)

歴文・11月研修会資料

東漢氏の渡来

東漢氏は、「東漢」を氏の名とする氏族で、文献により倭漢氏とも記述されるが、この資料では東漢氏で統一した。

「日本書紀」応神天皇の条に、「倭漢直の祖の阿知使主あちのおみ、其の子の都加使主つかのおみは、己の党類十七県の人々を率いて来帰した」と伝える。

また、倭漢氏は、「旧居帯方」の人民で、現在は「百済」と「高句麗」の間に住み、才芸あるものが多いので、これを改めて召集することを願い、「人民男女は挙落し、使したがいに随ことごとくひ悉く来る」と記されている。

そして、「大和高市郡檜前村」を賜わり居住し、ここを拠点として活躍し、於美阿志神社おみあし（檜隈寺跡）は、阿知使主あちのおみを祀っている。

畿内の帰化人は、河内・大和・山城（一部は近江）に集住し、いずれもその南部が拠点であった。そしてこの三大中心地が、それぞれ西文・東漢・秦の三氏の居住区に相応するものである。と同時に、畿内帰化人の歴史は、この三氏族から展開するといつてよい。

秦氏の氏族構成が、山城の宗族を中心に全国に分散する、ピラミッド型の典型を示すのに対し、漢氏・文氏は、官人貴族として大和・河内に集中した。前者は在地的、後者は都市的と、言いかえることも可能である。

東漢氏は、朝廷における活動からいっても、社会的・経済的な勢力からいっても、また一族の発展の状態からいっても、恐らく古い帰化人のうちで第一に指を屈すべきものであろう。漢氏は織物工芸に長けていたため、「漢」と書いて「アヤ」と読ませている。

東漢氏の発展

東漢氏は集団の総称とされ、門脇禎二は「東漢氏はいくつもの小氏族で構成される複合氏族。最初から同族、血縁関係にあったのではなく、相次いで渡来した人々が、共通の先祖伝承に結ばれて次第にまとまっていったのだろう。先に渡来した人物が次の渡来人を引き立てる場合もあったはず」と考えている。

東漢氏の祖は、五世紀の半ばにはその地位を確立したと思われるが、多分五世紀の末頃までに、まず三つの家に分れたらしい。後世これを兄腹・中腹・弟腹と呼んでいる。そのうちどれが本家でどれが分家だという差別はなく、対等の立場で分れたもののようである。その次の代にもまた分裂が続き、六世紀に入ってから多くの家が成立していった。

東漢氏で、七世紀末までに姓を確認できるものは、時代順にならべると、川原民直、坂上直、池辺直、長直、荒田井直、山口直、書直・文直、高田首、草直・蚊屋直、民直、田井直、大蔵直、路直、椋垣直・倉培直・蔵垣直、谷直、長尾直、宇閑直・於直、忍坂直、調首などが、欽明朝から天武朝までの間に確認できる。このうち記事の重複があるから、一応、東漢系 16 氏ということにしておきたい。

漢氏の発展の基礎となったのは、漢部と漢人である。漢部というのは要するに漢氏の部民で、はじめは朝廷から与えられたいわゆる職業部、すなわち手工業など漢氏が職務を遂行するのに必要な品部が主だったであろうが、しだいに純然たる私有民即ち部曲も増加していった。また漢人というのは、中国人と称して漢氏よりあとから渡来した帰化人で、漢

氏の部下になり、小さい氏を形づくった人々である

東漢氏は坂上氏^{ふみ}、書氏^{いみき}（文氏）、民氏、池辺氏、荒田井氏などの直姓氏族に分かれた。八色の姓では忌寸姓に改められている。八～九世紀には坂上氏が台頭し、宿禰・大宿禰を賜った。坂上氏のほかに東漢氏から出た諸氏には、平田氏、内蔵氏、大蔵氏、丹波氏、調氏、文部氏、谷氏、佐太氏、井上氏などがある。

東漢氏の文化・政治・軍事の力

東漢氏は、五世紀の半ば頃からしだいに勢力をのぼしはじめ、今來の才伎たちをその統率下におき、政府の役所に隷属した才伎たち（漢部）の管理者らを通じて、その勢力を獲得していった。

漢氏がこのように一族以外の帰化人を多く部下にとり込むことができたのは、一つには朝廷が外来技術を保護育成することに熱心で、それに都合がよいように技術者を組織しておこうとしたためであろう。

文化技術の担当者として本領を發揮し、それが著しく進行したのは、恐らく六世紀の前半であろう。

時代とともに次第に技術が旧式化するのはやむをえないなり行きである。五世紀以來、朝廷と中国南朝との直接交渉も行われたし、南朝の文化が百濟などを通して日本に入ってくるようにもなった。新來の帰化人（今來の漢人）も、そういう新しい文化・技術を身につけた人達であった。その結果、漢氏は、文筆・財務・外交・手工業その他すべてにわたって、実際の事務を部下に委ねて、自分はその上級監督者になって行った。

六世紀後半を境に、漢氏は新しい途を歩み始めた。専門の業務からは益々離れていった。それとともに分裂が進んで氏の数もどんどんふえてゆき、私有の漢部も急速に増大した。進んだ諸種の技術を握っていた彼らはいすでかなりの財力を貯えており、その経済力は相当なものであった。

その上、漢氏は武力においても相当なものだったらしく、大伴氏や物部氏などの世襲的な旧式軍隊にくらべれば、装備も戦闘力もすでにこれらを凌駕しはじめていたであろう。十分な兵力と、金工・革工などの技術を以て、優秀な兵器・武具を揃え、良馬の飼育・調教にも長じていたらしい。

このような財力・武力を基礎にして、漢氏一族は押しも押されもしない有力豪族となった。渡來人の頂点にたつ東漢氏の政治力にはあなどりがたいものがあり、いちはやく蘇我氏はこれと結託することを忘れなかった。

政治の舞台で活躍しはじめると言ったが、さすがに伝統の名残りで、文化技術方面の活動もある程度見られる。

仏教関係の仕事では、法興寺造営（元興寺露盤銘）、百濟大寺の造営（舒明紀）、大丹穂山に眸削寺（皇極紀）などに関わっている。

外客の接待、海外派遣などにも活躍しており、高句麗上表のときに、使節の出迎や相樂の客館の守護に当たっている（欽明紀）。

技術者としての仕事で、先に述べた造寺・造仏等以外に、百濟舶二隻の建造（孝徳紀）や難波京の造営に際して、大がかりな排水工事や造宮工事に当たった（孝徳紀）。

しかし、大化改新前後頃までの漢氏一族について、特に注目されるのは、経済力や軍事力を活かし、蘇我氏の側に立って行動した政治面での動きであろう。

六世紀に入ってから、政権は大伴氏から物部氏へ、さらに物部氏から蘇我氏へと移ってきたわけであるが、政敵の大連物部守屋を攻め亡ぼすことに成功してから、自分の甥の崇峻天皇を立てて、誰に遠慮することもなく政治を動かしていた。

皇極天皇四年（645）六月、乙巳の変により蘇我氏本宗家の入鹿は宮中で中大兄皇子たちに殺された。漢直らは早速、一族を全部あつめて武器をとり、蝦夷を助けて軍陣を張ろうとした。しかし、殆どどの皇族や諸豪族は、法興寺に陣を構えた中大兄皇子の側に味方したので、漢直らは形勢の望みのないことを知って四散し、蝦夷は死んだ。こうして大化改新は発足した。

改新政治は律令国家建設の道を着々と歩んでいったが、それは結局、中央豪族全体の仕事として行われることになったから、漢氏一族も、政治的生命を全く失わないですんだ。もちろん公民制の採用によって漢部の私有は否定されたけれども、それは他の諸氏も同様のことであった。しかし、いわゆるバスに乗りおくれた形で、漢氏一族が不遇の状態に置かれた様子うかがわれる。斉明・天智両朝にかけて、百濟救援の失敗、近江遷都など、改新政治が紆余曲折を経ている間、恐らく漢氏一族の大部分は、政府に参加して近江の大津京に移ることもなく、大和の高市郡で時日を送っていた。

天武天皇元年（672）の壬申の乱では、漢氏一族は、天武天皇の挙兵に大きな希望をかけて起ち上った。その結果、漢氏一族はかなり信用をとり戻したわけで、天武天皇六年（677）に、天皇は次のような詔を出して過去の罪を許した。

「汝等の党族は、もとより七つの不可を犯せり。ここを以って、小墾田の御世（推古朝）より近江朝に至るまで、常に汝等を謀るを以て事となす。いま朕の世に当り、汝等の不可の状を責めんとす。以て犯に随ってまさに罪すべし。然れども、ひたぶるに漢直の氏を絶さんことを欲せず。故に大恩を降して以て原^{ゆる}す。今より以後、もし犯あらば、必ず赦さざるの例に入れん。」

この七つの不可というのが何々を指すかははっきりしないが、過去の経歴を水に流したのは、一つには天皇が都を飛鳥に戻したため、高市郡一帯に拡かっている漢氏一族の勢力を無視できなかったことにもよるであろう。

こうして八世紀の初め奈良時代に入る頃には、完全に律令貴族の仲間入りを果たした。こののち奈良時代の後半になると、一族の中で坂上氏が勢力を伸ばしてくる。

坂上田村麻呂が蝦夷征伐で有名ですが、末裔は大阪の平野におられるようです。

（参考文献）

1. 帰化人と古代国家（平野邦雄・吉川弘文館）
2. 帰化人（関晃・日本歴史新書）
3. 帰化人（上田正昭・中公新書）
4. 謎の豪族蘇我氏（水谷千秋・文春新書）
5. 飛鳥の古社を歩く（和田萃・河出書房新社）
6. ウィキペディア

（引用文献では、帰化人とされている部分を、渡来人に統一しました）

歴代天皇の御陵と古墳の関連

古墳名	五条野丸山	梅山	太子西山	春日向山	山田高塚	植山	忍阪段ノ塚	牽牛子塚	岩屋山	中尾山	山科御廟野	野口王墓	束明神古墳
	奈良最大の前方後円墳	最後の大型前方後円墳					最初の八角墳						
墳形	前方後円	前方後円	前方後円	方墳	方墳	方墳	八角墳	八角墳	八角墳	八角墳	八角墳	八角墳	八角墳
規模	310m	140m	93m										
時期	6C	6C	6C末	6C末	7C	7C初め	7C	7C後半	7C中頃	7C末			
御陵名	畝傍陵墓参考地	ヒノクマノサカイノササギ 檜隈坂合陵	コウチシナガカノオノミ 河内磯長中尾陵	コウチシナガハラノミササギ 河内磯長原陵	シナガノヤマダノササギ 磯長山田陵	国史跡	オシサカウチノササギ 押坂内陵	国史跡	国史跡	国史跡	ヤマシノノミササギ 山科陵	ヒノクマノオオウチノササギ 檜隈大内陵	
宮内庁治定		欽明	敏達	用明	推古		舒明				天智	天武・持統	
判定				○	○		○				○	○	
古墳の主	欽明	敏達	石姫 (欽明皇后)	用明	推古	空墓	舒明	斉明	空墓	文武	天智	天武・持統	草壁皇子
代位	29	30		31	33		34	35・37		42	38	40・41	
没年	571	585	572+α	587	628		641	661		707	671	686・702	689
改葬	堅塩 欽明と合葬	堅塩 敏達	敏達	用命 磐余(磐余池上陵)から改葬	推古 竹田皇子と合葬	推古 竹田皇子と合葬	舒明 643年に飛鳥(滑谷岡陵)から改葬	舒明	斉明	斉明			

* 32代: 崇峻天皇

敏達陵(585没)が梅山古墳になるまで、14年間

(推古の改葬計画)

(591) 石姫(欽明の皇后)陵: 太子西山古墳に敏達を合葬

(593) 同母兄: 用明を磐余から太子西山古墳に改葬

(612) 堅塩媛(皇后扱い)を檜隈大陵: 欽明陵に合葬

(620) 夫: 敏達を檜隈陵: 梅山古墳に改葬 (大阪大学 高橋照彦 説)

舒明天皇陵(日本書紀: 641年に崩御、翌年、飛鳥・滑谷岡陵に埋葬)

滑谷岡(なめはざまのおか)陵(舒明天皇の初葬墓) = 小山田古墳か?